

「男（漢）気ある」と言われるチーム力

★主将高山・獅子奮迅のエース鈴木

先日の東部総合杯を、チーム力を象徴しているマイルで勝ち取ったわけだが、その中核をなす鈴木雄太の強さは1年時より際立っていた。

鈴木雄太は現在、高校埼玉の400mの王者である。

一昨年、1年生の新人戦で400m50秒0で走り切った鈴木は、200m、400mR、1600mRという高校生のフルエントリー状態で走り続けた。

県新人戦最終1600mRは決勝のアンカーを務め、1年生の時点でチームの主軸を担うたくましさを身に着けた。

一見オーバーストライドに見える彼の走法は、腰が乗っていて手足を最大限に使って走るミドルスプリントの新しいスタイルであると言われている様だ。昨今、南関東勢の短距離が圧倒的に優位にたったのはこの走法の定着が及ぼすものという意見もある。

鈴木の特徴は競り合いに強い事、失速しない事。

2年の学総、準決勝で48秒86をマークしトップ通過となった。決勝入賞当確、関東か・・・と誰もが思った矢先・・・決勝は脚の痙攣・・・本来なら青木らと経験できたかもしれない山梨関東を逃してしまった。

この悔し涙が鈴木をより高い意識へと導いた。

その2か月後、石上と私は東部国体一次大会でその驚愕の走りを見たのだ。

1600mRの決勝。3走までで春高は8位と後退してしまった。

以下、その写真を見ていただきたい。

アンカー鈴木がバトンを受けた時は8位でトップとは50m以上の差があった。

写真を撮りながら、「東部のアンカーはみな速い。8位からよくて6位かなあ」と思っていた。しかしその直後、競技場は大きな歓声に包まれる。なんと最下位から追った鈴木が、あっという間に4人抜きを演じたのだ。

競技場は騒然となった。
直線に入るといつの間にか春高が3位に追い上げている。



2015.7 国体一次のマイル。

先頭は、はるか先に。この時点で春高は、まだバトンすら届いていない



50m差を驚異のごぼう抜き。
もう少しで大逆転まで詰め寄る



地区予選ではないとはいえ、春日部東、共栄、昌平、八潮、不動岡などいずれも県大会入賞歴のあるチームである。決して安易な相手ではない。

鈴木勢いは衰えず、あれだけ差のあった昌平、八潮に肉薄した。

惜しくも僅差で3位に終わったが、いったい何秒で回ってきたのか・・・

ラップを知りたかった・・・表記はされないが50m差を追いつくという事は、48秒くらいでカバーしたのではないだろうか・・・

その昔、インターハイ入賞を果たした400mHの鳥海や400mの塩川らはマイルのラップタイムがすさまじかった・・・と監督から聞く。全国で通用するスプリンターならではの特征なのだろう。

その2か月後、新人県大会。鈴木は後藤乃毅以来10年ぶりの春陸短距離埼玉県の王座を獲得する。



10年ぶり県大会、短距離王者誕生の瞬間（県新人にて）

★総合力の高いチームは意識が高い

高山（110mH）主将の率いる今年のチームは充実していた。トラック、フィールドともに多くの入賞を果たし得点を重ねている。特に幅跳びで6m91cmの渡辺 啓暉には久々の春陸7mジャンパーの誕生を期待したい。

最終日の朝の時点でトップをキープ。しかし毎年のように全国的な活躍をする春日部東、昌平高校などが肉薄している。どの決勝にも複数残っていてどんどん差を縮めてくる。

結局総合はマイルの順位に託された。春日部東は7点差。うちがバトンを落としたり故障すれば逆転負けだ。



春陸は200m400mで入賞している内田、岸田と400mHを大差で制した武田 凱（2）、そして記録のでにくい400mを2位に1秒半の差をつけた絶対的王者の鈴木が、このマイル東部大会連覇を誓う。

1走から優位をキープし、トップでアンカーまでバトンを繋いだ。

とはいえ、春日部東や昌平のアンカーらはともに県大会入賞組の実力者だ。

鈴木は実は不調であった。最終日200mでは昨年、追い風ながら21秒8で走っているが、今日はスピードがでない。しかし、総合杯を取るためフルエントリーを続行した。

ラスト100m、完全に春日部東、昌平との三つ巴になった。みな県大会入賞者。県の前哨戦のようだった。全ての観衆の声援を受け、マイルのアンカー勝負は大



会の最大の華である。

総合杯はアンカー勝負に。
みな県大会入賞者だ。

とにかくトップでフィニッシュすることが最優先項目だし、400mにおいては絶対に負けれないという思いもあったろう。

鈴木はゴールした。そしてすぐに後続を確認した。



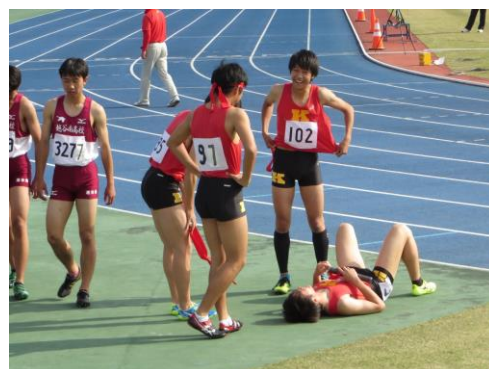
全てを出し切りしばらく動けなかった。駆け寄るマイルメンバー。「よし、抑えた。総合取った！」というゴールであったろう。

この瞬間、7年ぶり学総の優勝が決まった。

★他校監督曰く「男（漢）気のあるチーム」

毎回のHP表紙撮影を終え、春は7年ぶりか・・・と思った。そういえば槍の黒須がいた時だったなあ・・・と当時を思い出した。意気揚々と帰ろうとしたら、某高校名監督の先生にお会いし、挨拶したところこう言われた。

「彼らは男（漢）気のあるチームですね」と。



今回の東部を振り返り、様々な総合優勝を巡るストーリー、やり取りがあったのは私にも伝わった。たった2週間後に県大会があるので、出場や仕上げを遅らせる作戦が、春高も含めて多々みられた。したがって順位予想も難しくうちの選手も仕上がっていない者もいて総合の行方は混沌としたのだった。

ただ、1600mRの優勝が、必須条件と決まった時点で、鈴木は不調の200mに続きマイルのフルエントリーを決めたのであった。その甲斐あつての総合優勝。エースがチームプレイに徹したのであった。

★県大会を見据えて

昨年県新人は総合3位である。しかし春の学総は新人と比べ、入賞はばらせるのは毎年

の流れで必定。

冬を越して大化けする選手もいるので、新人の順位は全くリセットしなければならない。それは想定の上、慌てず安定した集中力と、勝負本番に動じない度胸が勝ち上がっていく者の特徴であると思う。受け身に回らない、動じない姿勢・・・青木涼真を見てきてとくにそう感じた。

トラックもフィールドも今年は楽しみなファクターが揃っている。

しかしリレーの中心になる鈴木は、力配分には気を付けねばなるまい。初日から400m 3レースという過酷さのため、(こんなスケジュールは世界でも日本の高校生の試合だけであろう) 決勝にスタミナ温存して欲しい。関東以上を狙うなら200mはマイルと重なり危険か・・・青木涼真が1500m、5000mを捨てて1種目に集中したように、いくつか選択しなければいけないだろうか・・・などいらぬ心配を巡らせてしまうのはOBの心情。東部と異なり、1点～2点を稼ぐための出場は無用の関東予選なのだから。今年是非、後輩たちに歓喜に包まれた最終日を迎えさせてあげたい・・・と心から思う。

37回 野本

なんとも凛々しい、男の顔つきになったものである。



